

第159回神田学会レポート

2/23(木) 18:30~20:45

2月23日にステーションコンファレンス神田万世橋にて第159回神田学会を開催いたしました。好評をいただいている老舗トーク企画の第5弾となった今回も、葬祭・出版・書店と異業種の老舗トップをお招きし、その歴史と将来展望について伺いました。

博善株式会社

創業明治34年(1901)
代表取締役社長 6代目 藤井城氏

私は元々他の会社に勤めていましたが、平成10(1998)年に博善に入社し、父が病に倒れ、平成17(2005)年に代表取締役社長に就任しました。博善の歴史についてご説明いたしますと、我々は葬儀社ですが、半分は火葬場事業から始まっています。創業者である木村莊平氏は、牛鍋屋等の経営の傍ら、日暮里、桐ヶ谷の火葬場を保有し、これが東京博善の元となります。一方、現在の博善の礎となる葬祭事業もしており、大正15(1926)年に火葬事業と葬祭事業は合併します。社名の博善は「善を博める」という意味で、公共性のある大切な仕事として、この名を使用しております。以後、都内六か所の火葬場を民営の独占企業として運営しております。博善は葬儀部門として独立してはいたのですが、昭和4(1929)年に兼業分離し、神田鎌倉町(現在の内神田二丁目付近)に葬儀相談所を開設し、法人化いたします。

葬儀業界はバブルが崩壊した90年代も余波を受けることなく、2000年代になっても超高齢化社会に伴う死亡人口の増加で成長産業だと持て囃されました。そんな苦勞知らずの業界に試練が訪れます。この業界は許認可事業ではないために、異業種産業の参入を安易に許してしまいました。また現在葬儀の簡素、簡略、小型化が進んでおり、この10年で危機的状況を迎えつつあります。しかし、社会において必要不可欠な生業であると思っており、数の多少、規模の大小、金額多寡ではなく、どんな形でもその故人・遺族の思いに寄り添ったお葬式の形を模索していくのが、今後の我々の使命です。

また、創業理念でもある「善の営み」は、仏教でいうところの奉仕と無我の精神。こちらに取り組み、皆様の漠然とした不安や悩みを寄り添って、サポートをすることも私どもの役目です。いかなる時代になろうとも、葬儀は仏教の延長にあることをポリシーとし、私の話を締めさせていただきます。

株式会社三省堂書店

創業明治14年(1881)
代表取締役社長 4代目 亀井忠雄氏

まずは歴史について申し上げますと、創業者の亀井忠一は元旗本で明治6(1873)年に東京・麹町

にて下駄屋を始めます。その後明治14(1881)年に四谷の大火で焼け出され、知人の勧めで現在の神保町一丁目古書店を開きます。2年後には出版を企画するようになります。

亀井眞雄は私の祖父の兄に当たり、帝大卒業後、大正5(1916)年に三省堂出版部に入り、昭和3(1928)年に書店の初代社長として就任します。その後の豊治が2代目社長に、眞雄は会長になりますが、昭和26(1951)年に亡くなります。書店は利が薄いため、豊治は石鹸や化粧品やネクタイなどの洋品関係も扱いました。

3代目である父は亀井分家筋の婿養子で、昭和56(1981)年の創業100周年の時に、現在の神保町本店を新築いたしました。その10年ほど前に私も入社しており、建設の基本計画から携わりました。大きな店舗だったので実験的なことができ、それが現在の三省堂書店に活きていると思います。私が社長になったのは平成8(1996)年。ちょうどバブルが弾けた後ですが、この時が出版界の売り上げのピークで、2兆6千億の商いでした。それが毎年少しずつ落ち、現在はピークの6割までになっています。社長就任時に私は社員に向けて「何とか一番最後に潰れる本屋になりたい」と言い、社員にはそれが受けて「やりましょう、社長」と全員と握手を交わし奮起に繋がりました。現在は、書店だけでは難しかったため、「神保町いちのいち」という雑貨系を扱うお店を開発し比較的うまくいっています。本屋をやってきたノウハウ、つまり色々なジャンルのものを扱う感覚が活かしていたからだと感じております。

書店はモノを売るだけでなく、コトも提供できる場所であれば未来はありません。書店というものを守るため、そして愛していただくために、これからも新しい書店の在り方を追求していきたいと思っています。

株式会社有斐閣

創業明治10年(1877)
代表取締役社長 6代目 江草貞治氏

私は会社の歴史を簡単に説明しながら、出版の未来はどのようになるか、そしてその中で有斐閣の役割は何かということをお話させていただきます。

先に結論めいたこととなりますが、創業者は必ずしも出版をしたかったのではなかったと思います。大政奉還によって失業した時に、せめて好きだった学問のそばにいたいと思ったことがたまたま出版

という形で実現し、そして出版を通じて、自分の夢を誰かに託したのだと思っております。

創業者である初代江草斧太郎は忍藩の微禄の家の息子で、明治10(1877)年に独立し、藩の殿様から50円をいただき、当時の一ツ橋通り町4に開業しました。2代目の重忠は養子で農学部出身、3代目四郎もまた養子で法学部出身でした。4代目忠允と5代目忠敬は私も直接目にした方になります。さて、これからの学術出版は目的で言えば3つあるのではないかと思います。それは、研究成果の公表という書く側のモチベーション。知りたい、学びたいという意欲を持つ学ぶ側のニーズ。そして学生の学習をサポートする教える側のニーズ。読者に応じて出版された本を通ることでそれぞれの目的へ行きつくということです。

学術出版の未来、とりわけ有斐閣のビジネスは教育や研究環境の進化に左右され、紙媒体にこだわらないビジネスであると考えております。例えば、オープンアクセスジャーナルの運営費は購読料ではなく、執筆者が払う掲載料で成り立っています。これまでとお金の流れが逆転し、これも未来の本の形の一つであり、これからの目的に応じて、色々な形の本が出てくると思います。もちろん紙の本でじっくり読書をすることもあれば、論文を書くためにネット媒体で読むこともあります。こうしたリクエストに対応していくことは、創業者の学問に寄り添っていきたいという願いに、必ずしも背くことではないと思います。今後の見えない世の中ですが、有斐閣はこれからもトライしていきたいと思っています。



時代は常に変化しますが、創業者の思いや企業としての在り方によって老舗としての芯が継承されています。次回神田学会は2017年夏頃を予定しております。詳細は当会HP (<http://www.kandagakkai.org/>) をご覧ください。

※オープンアクセスジャーナル：学術雑誌のうち、オンライン上で無料かつ制約無しで閲覧可能な状態に置かれているもの。

講師プロフィール

各企業の歴史についてインタビューした「百年企業のれん三代記」は、「神田アーカイブ (<http://www.kandagakkai.org/>)」にて好評連載中です。

藤井 城 (ふじい・じょう)
創業1901年(明治34年)博善株式会社代表取締役社長。6代目。東京博善株式会社の創業時より、仏教界を代表して任にあたった祖父藤井教詮上人より親子三代に亘って葬祭事業の経営にあたる。大規模葬から個人葬まで1,000件近い葬儀施行を担当。また津軽三味線奏者としても著名。

亀井 忠雄 (かめい・ただお)
創業1881年(明治14年)、株式会社三省堂書店代表取締役社長。4代目。出版の「三省堂」は大正時代に分離別法人に。首都圏を中心に全国に店舗・営業所を展開し、本年4月に神保町、池袋、札幌に並ぶ旗艦店を名古屋に開店。時代の変化に対応した多機能型店舗を追及している。

江草 貞治 (えぐさ・さだはる)
創業1877年(明治10年)、株式会社有斐閣代表取締役社長。6代目。法学学を中心に社会科学系学術書・テキストを発行している。創業からほぼ同じ場所で事業をしており、神保町で最も古い出版社の一つ。紙の出版からオンライン配信なども手がけている。